

東海中学校における名誉校長椎尾辨匡の講演活動

—戦前の校報「東海会報」を拠りどころに—

高 木 茂 樹

0 はじめに

東海中学校の名誉校長であった椎尾辨匡博士の胸像は、かつて中学の旧北校舎と高校の旧中校舎の間にあった。たわむれに中学生の制帽がかぶせられている光景も見受けられた。校舎改築が一段落すると、胸像は明照殿を背後に正門を見据える場所に移され、登下校の生徒たちを見守っている。

私自身、東海高等学校に奉職して四半世紀ほどの時が流れ、毎日のように胸像を目にしているが、椎尾博士について知り得ていることはほんのわずかだった。歴代の校長が式辞などでしばしば引用する「学ばざる者は去る」。1912（大正元）年、台風により校舎が倒壊し、学校存廢の岐路に立ったとき、椎尾博士が生徒や教員になげかけた言葉だった。椎尾博士が校長となって、学園は息を吹き返した。そこで椎尾博士は「学園中興の祖」と称されている。椎尾博士が始めた「共生」運動によって「共生」という言葉が人口に膾炙した。この程度であった。

学園に残る「東海会報」の記事を拾い出したところ、椎尾博士が生徒や教職員に直接語りかけた講演の記録を多数確認できた。門外漢の私には、椎尾博士の思想を宗教学や仏教学の分野からアプローチすることができない。ただ、学園運営に携わる教育者としての側面からなら可能であるように思える。本稿では、この講演録に依拠しながら、椎尾博士が何を思い、何を語り、何を伝えようとしたのかを解明していきたい。

1 「東海会報」の概要

東海中学・高等学校図書館に所蔵されている「会報」は、発行年月日が1920（大正9）年9月1日付から1943（昭和18）年9月10日付までで、簿冊2冊に収録されている。第1号の「会報」は1911（明治42）年の発行で、年1回の発行であっ

た¹。

1920（大正9）年9月1日付の第10巻の1以降、年10～12回の発行となった。「校友会会報」（第10巻の1～）、「会報」（第11巻の1～）、「団報」（第32巻の6～）²と表記は異なるものの戦時下まで発行され続けた。東海の題字が共通しているの
で、簿冊の表記に合わせてここでは一括して「東海会報」として扱う。

1920（大正9）年9月1日付の第10巻の1には、年間発行回数を増加させた目的が4点示されている。

- 第一、学校と家庭との連絡をして一層適切ならしめんが為め
- 第二、生徒の成績を発表して修学奨励の一助たらしめんが為め
- 第三、全校生徒の「読物」とする為め
- 第四、学校と卒業生並に卒業生相互間の連絡和親を計る為め

「会報」は在校生とその家族だけでなく卒業生も対象としており、「同窓会報」も兼ねた存在であった。成績開示が目的の一つであったことは注目される。第三の「読物」とすることについて、記事では、世の中に書物や雑誌は多数あっても生徒に読ませたいと思うものはなかなか見あたらず、大多数の学校では教科書以外のものを厳禁していると述べられている。図書部を設置して任意に生徒に閲覧させているが、「更に職員が日常の見聞又は書物や新聞雑誌等に注意して生徒に有益なる事項を蒐集し誌上に紹介して生徒の健全なる常識を養ひ趣味の向上を計る資料にしたい」³との目的が詳しく示されている。椎尾講演録も「読物」の主要な柱であったに違いない。

2 椎尾講演の概要

表1に示す通り、椎尾講演に関わる記事は全部で69本あった。講演録が53本、彙報欄などに日時や演題のみ示したものの16本である。記事のある1922年から1942年は椎尾校長時代〔1913（大正2）年3月13日～1920（大正9）年1月22日〕には該当せず、名誉校長となって以降の期間である⁴。椎尾博士が共生結集を始めたのは1921（大正10）年。1928（昭和3）年には衆議院議員に当選しており、通算3期の在職期間⁵とも重なる。全国各地で講演活動を活発に行い、宗教家としても脂がのった時期でもあったはずだ。講演録の冒頭の紹介文には、「博士は

夜汽車で御来名になつて、今の今まで某所で御講演になり午後の三時からは復、某所の講演に臨まれる御予定」⁶とあり、多忙な日常がうかがわれる。

東海中学校での講演は、全校一斉もあるものの、その多くが一つの学年、もしくは複数の学年を対象とした生徒向けであった。「学年集会」のような比較的小規模な単位で多くの講演が実施されていた。職員向けの講演や母の会での講演も行われた。

卒業生であり、名誉校長であり、衆議院議員であった当代一流の雄弁家の椎尾博士の講演は、在校生にとってその警咳に接する貴重な機会だったはずだ。「其息も隙も無い御精進には、一同先以て感激に撃たれ、諄々と説かれた御教訓に対しては、今更らに覚醒の血を燃さずには居られなんだ」⁷とあり、感化を受ける者も多かったと想像できる。

講演録には記録者や校閲者の名前が記されている。記録者に弁論部員の名前もある。講演録は椎尾博士の口述を記録したものがベースになっているが、「博士講演の大意を記したもの」⁸とあり、逐語的な講演録というよりは大意を損なわぬ程度に編集が加えられたものと考えられる。藤井實應浄土門主は、共生運動中の椎尾博士の様子を「一日五席乃至六席の原稿なしの熱烈な講話」⁹と表現しており、東海中学校でも原稿なしの熱気あふれる講演が行われたものと思われる。

これらの講演録の多くで鈴川英という人物が記録者や校閲者として名を連ねている。大正15年度職員組織表を見ると、鈴川の担当教科は算術・代数で、1年担任と教務を兼任している¹⁰。

昭和4年度の担当教科は習字で、教務を担当している¹¹。在職期間は1921（大正10）年4月1日から1935（昭和10）年3月31日まで¹²。鈴川の退職したのちの「東海会報」に、椎尾講演録は2本しかなく、それ以外はすべて彙報欄での記録となる。鈴川が講演録の大部分の編集にあたったと考えてよいだろう。「東海会報」は在校生とその家族、および卒業生を配付対象としたもので、過度の編集をかける必要のない内向きの広報誌である。そうした性格を考慮すれば、名誉校長という立場から発せられた忌憚のない本音の講演が記録されたものと言えよう。

表1

	発行年月日	記事の表題	講演の日時と対象者	講演録の有無
1	1922.02.01	椎尾博士の講演	1922年1月20日午後1時より1間半余り	×
2	1924.11.01	最近米国に於ける宗教と教育との新関係		○
3	1926.05.22	覚醒生活	1926年4月24日、四五年生	○
4	1926.07.18	椎尾博士講話	1926年5月10日午前二三年生、午後一年生(1時間)	○
5	1927.05.31	模擬と創造	1927年5月20日、二三年生	○
6	1927.06.30	難関突破の法如何	1927年4月25日、四五年生	○
7	1927.11.28	誤れる体育	1927年11月5日、三四年生	○
8	1927.12.12	創造的学習態度	1927年11月24日、一二年生	○
9	1928.04.28	五年生の覚悟	1928年4月10日、五年生	○
10	1928.06.25	中学生の行くべき道	1928年4月10日、四年生	○
11	1928.07.20	大国民となるの道	1928年6月11日、三年生	○
12	1928.09.25	学習の方法		○
13	1928.11.30	御大典記念	1928年10月5日、四年生	○
14	1928.12.20	新時代の学生の覚悟	1928年11月12日、五年生	○
15	1929.03.06	時代を解せよ	1929年2月18日	○
16	1927.07.20	学生への警告	1929年6月17日、五年生	○
17	1929.09.27	人間性を發揮せよ	1929年7月11日、四年生	○
18	1929.11.26	研究精神	1929年11月11日、五年生	○
19	1930.01.29	東中精神	1930年1月21日、一年生	○
20	1930.03.06	第一線に立つて働け—卒業式訓示にかへて—		○
21	1930.04.29	志望を確立せよ	1930年4月12日、五年生	○
22	1930.05.25	華山先生を偲ぶ	1929年11月12日、四年生	○
23	1930.06.25	真実の学修法	三年生?	○
24	1930.07.20	志気を確立せよ	1930年1月25日、三年生	○
25	1930.09.26	深く耕せ	1930年7月14日、一年生	○
26	1930.11.27	国語の建設に進め	1930年7月14日、五年生	○
27	1931.02.28	死を破つて進め	1931年1月30日、四年生	○
28	1931.03.03	卒業後の進路	1931年1月30日、2月20日四五年生	○
29	1931.04.30	行る可き時は今	1931年2月20日、一年生	○
30	1931.05.28	三つの浪費	1931年2月10日、三年生以下	○
31	1931.06.28	作業教育について	1931年6月1、5日、三年生以上	○
32	1931.07.18	勤儉誠実	1931年6月1、5日、三年生以上?	○
33	1931.11.06	教育の将来		○
34	1932.01.31	時局に対する国民の覚悟	1931年12月4日、全校	○

東海中学校における名誉校長椎尾辨匠の講演活動

35	1932.03.06	涅槃	1932年2月15日	○
36	1932.04.30	法然上人	1932年4月8日、一二三年生	○
37	1932.09.28	国体精神の発揚	1932年9月16日、全校	○
38	1932.10.30	母の責任	1932年10月10日、母の会総会	○
39	1932.12.20	四五五年のお母様方へ	1932年11月27日、四五五年母の会	○
40	1933.03.07	中学を卒へんとする諸君へ	1933年2月13日、四五五年生	○
41	1933.04.28	朝鮮の教育	1932年12月3日、職員	○
42	1933.05.28	聯盟離退の詔書と本校精神	1933年4月24日、全校	○
43	1933.07.20	衆庶各々其業務に淳励せよ	1933年7月4日、職員、全生徒	○
44	1933.09.30	日本精神	1933年9月15日、職員、全生徒	○
45	1933.11.30	過去十年と将来の十年	1933年11月20日	○
46	1933.12.20	釈尊の成道	1933年12月8日	○
47	1934.03.07	新卒業生への錢	1934年1月15日、五年生	○
48	1934.04.29	本校の特色	1934年4月10日	○
49	1934.05.31	学年初に於て	1934年4月20日	○
50	1934.11.07	満鮮土産	1934年9月1日	○
51	1934.12.22	徹底的に進め	1934年10月26日	○
52	1935.03.07	昭和十年を迎へて	1935年1月14日	○
53	1936.01.30	記念講演成道会		○
54	1936.06.30	台湾の旅		○
55	1936.09.28	(満州事変に関する講演)	1936年9月14日、(全校)、母の会	×
56	1937.01.30		1937年1月11日、五年生	×
57	1937.05.31		1937年5月15日、母の会	×
58	1937.06.25	(時局に関する講演)	1937年6月4日、職員	×
59	1937.09.25		1937年9月10日、2時間	×
60	1938.04.30		1938年4月18日、母の会総会	×
61	1939.07.15	(宗教講演)	1939年7月3~5日、全職員、始業前1時間	×
62	1939.10.15		1939年9月6日、全生徒	×
63	1939.11.25		1939年10月2日、四五五年生	×
64	1940.01.25		1940年1月15日、五年生	×
65	1940.05.10		1940年4月26日、父兄会総会	×
66	1940.11.03		1940年10月4日、母の会例会	×
67	1940.12.25	(新体制により将来の社会制度の変革並びに此れに対する学生の進むべき方向態度に就きての講演)	1940年11月25日	×
68	1941.05.10		1941年4月14日	×
69	1942.02.10		1942年2月9日、五年生	×

3 講演の内容

「東海会報」に詳細な記録された53本の講演が実施された1924年から1936年というのは、どのような時代だったであろうか。世界的に見ると、ソ連の成立をうけて社会主義の影響が世界的に波及した時期であった。日本国内では、1923年に関東大震災が起る。1925年には社会主義の脅威に対する「飴と鞭」の政策といわれる男子普通選挙法と治安維持法が公布される。1926年末に昭和への代替わりがなされた。1927年の金融恐慌で経済の先行きが不安視されるようになる。その後、1931年の満州事変、1932年の五・一五事件など、軍国主義の台頭と大陸進出が顕著になってくる。1933年の国際連盟脱退、1936年の二・二六事件などを経て、戦時体制の強化へと時代は流れていく。

53本の講演はこうした時代背景のもとに展開されたのである。本稿では講演の一つ一つを個別に取り上げることはしない。椎尾博士が何を思い、何を語り、何を伝えようとしたのかを53本の講演全体を通じ、総体的に捉えていきたい。その際、いくつかの視点から講演録を読み解くことにする。

(1) 椎尾博士の思想信条

まず、天皇に対するまなざしである。明治天皇をはじめ天皇に対し、多く言及している。明治天皇については、1891年の大津事件でニコライ皇太子を見舞った迅速な対応などを例示し、つつ、「誠に偉大の御人格にわたらせられた。其偉大に拝せられた根源は、何事にも信念を以て当らせられた事と、又何事にも全力を御傾注になつた処に有つた」と称賛する。自身が東京帝国大学卒業時に銀時計を拝受した体験を回顧しつつ、「明治大帝の御前に佇立した時、大帝の詔に対しては身も心も捧げやうと決心した。其決心が私の志を立て、私の一生を指導していく信念となつた」¹³と、明治天皇に対して崇敬の念を示し、精神的支柱であると明言している。

昭和天皇については、「神武天皇以来百二十余代の天皇中明治天皇は特に偉大の御性格で有つたが、今上陛下は祖父大帝に誠によく似通はせ給ふ」と、明治天皇同様の心情を吐露し、「此御力強き若き帝の御心に副い奉り昭和の御代に処さねばならない。聖旨の大要は、明治、大正の御心を承け、遠祖の御心に基き、堅実なる民風を作興し、更らに世界の調和を計らせられんとする処に在ると拝察す

る。我々は教ふる身と、学ぶ身とを問はず、各本分を尽して聖旨に順応せなければならぬ¹⁴と決意を表明している。

藤井實應浄土門主も、「戦中の皇道佛教提唱は単なる時流に投ずるものではなく、明治人としての先生の皇室への崇敬の本来的なものに基因する¹⁵」と回想している。椎尾博士が皇室を尊重する揺るぎない立場をとっていた証左であろう。

次に、時代をどう捉えていたかである。1927年5月の「模擬と創造」という講演では、冒頭で昭和天皇の「浮華ヲ斥ケ質実ヲ尚ヒ模擬ヲ戒メ創造ヲ勗^{はげ}メ」という踐祚後朝見式の勅語を引用する。「近頃文化生活といふことが流行して、それは如何なる事かといふと、青や赤の瓦を並べたり、和洋の料理をチャンポンに付けたりすることを言つて居る。成る程、文化の文字はあやを以てばけるので、かやうな事も当らう」と批判しつつ、文化は「花よりも実、体裁よりも実質^{たつと}を尚ぶ、真剣な無駄の無いものにせねばならない¹⁶」と断じている。大衆文化の広がる時世を表層的な浮足立ったものと認識しているようである。

1927年4月の「難関突破の法如何」という講演では、金融恐慌後の状況を見据えてか、「現代の日本社会は実にあらゆる方面が神経衰弱にかゝつて居る。就中目下は経済界が最も甚しい様である」と、断言する。教育高調の時にかかわらず、卒業生の就職難は年々厳しくなり、その結果自殺者が増える。死を選ばぬ者は、「危険思想の持主、知識遊民¹⁷」になると警告する。

1929年6月の「学生への警告」という講演でも、「諸君を誘惑する魔物に酒と女が有るが、更らに恐るべきは赤化運動者で有る。彼等は今や中等高等の学生を対象として猛運動を起して居る。彼等の運動は間接運動であるために、其一節づゝを観ては分らないが之を全体的に眺むる時誠に恐るべきものを認むるで有らう¹⁸」と、警鐘を鳴らす。椎尾博士は社会主義を危険思想として敵視していたのである。

1933年4月の「聯盟離退の詔書と本校精神」という講演では、五・一五事件などを経た世情を「昨年の暮から諸方面の行詰りがハッキリ意識せられるに至つた。思想上より言へば、大学生中に極端な左傾が有ると同時に、激烈な右傾分子が現れて来た¹⁹」と、左派だけでなく右派の動きにも警戒する。同年7月の「衆庶各々其業務に淬励せよ」という講演では、「世には神経質で、他人の行る事ばかりに目

を着けて、兎もすれば気に入らぬと言ふので手を挙げて殴りつける者が有る。(右傾)それはいけない。自分が真直に行つて行けば良いのだ。又理屈ばかり捏ねて、行るべき事を行らない。何故行らぬかと問へば、明日から確り行るのだと言ふ。(左傾)此二者は共にいけない。真直な所に眼を着けて自分の仕事を確り行るのが宜しい²⁰と、左右両派を非難している。

椎尾博士は当時の表層的な文化の大衆化に異を唱え、「浮華輕佻を去り、恭儉勤勉に仕事をする」²¹ 社会の実現を望んだ。皇室尊重の立場ゆえ、左右両派の活発な動きに神経をとがらせ、国体を危うくするものと感じていたに違いない。

(2) 椎尾博士の宗教観

椎尾博士は仏教をどのように捉えていたのか。1932年2月の涅槃会の講演には、その仏教観が端的に表現されている。釈尊の生誕、四門出遊、スジャータとの邂逅を経て、釈尊の覚りの場面へと話はつづく。

そこで生きかへつた気持ちになり、ブダガヤの平野に出で菩提樹の下に静座して真の人生を考へた。此身体が自己一人の物で無い事が分つて来た。天地諸力の集合体で有る。それで一木一草悉く自然の相を現はして居る様に人間も人間らしい生活をせねばならぬ。禽獸草木より尊い働をする事だ。目覚と喜の中に働く事だ。今日の喜が空前の喜となるには今日の覚醒が無ければならぬ。毎日研究真を求めて止まざる心之を仏教で大菩薩心と言ふが、之に依つて向上発展するのである。人々各自に職業が有り、使命が有る。それに対して満幅の研究満腔の力を打ち込む時、本当の樂が有る。これが涅槃で有る。我々の肉が喜びの中に働き、本当の仕事の中に働く之が涅槃で有る。諸君が学習に純真に力を打込み得る時、其瞬間が涅槃に達するのである。人生の目的は物知りになる為でない。金持になる為でも高位高官になるためでも無い。研究的生活、向上的生活に全力を叩き込んで行く時、人生の真生活が有るのである²²。

この講演で椎尾博士は、「此身体が自己一人の物で無い事が分つて来た。天地諸力の集合体で有る」との表現で仏教の根本原理「縁起」を説いている。1933年12月の成道会の講演でも、「第一此身体が天地の力、親の力、社会の力の集合体で有る。我々が自己の業務をいそしむ時、それはやがて天地の力の現はれである。

それが^{やが}聽て天地の公道であり世の中の生命である」²³と、同様の表現をしている。椎尾博士は講演の中でしばしば仏教の根本原理「縁起」の内容を提示している。この命の縦横のつながりが「共生」という言葉に収斂するのである。

縁起に基づく根本原理を理解すべしという文脈で、「目覚」や「覚醒」という言葉が用いられる。その上で、「我々の肉が喜びの中に働き、本当の仕事の中に働く之が涅槃で有る」という言い方で肉体と精神との関係を論じる。1926年4月の「覚醒生活」という講演では、「肉体を養ふと共に社会の一員である事を自覚し社会生活を完全にするが為に肉体も精神も充分に活動する様一日一刻も醉生夢死に陥らぬ様に」と注意喚起し、「ギリシア・ローマの市民のように労働をさげすみ安逸生活を求める餓鬼道」でもなく、「いやいやながら仕方なしに労働する奴隷生活畜生道」でもないという人間が歩むべき指針を示す。「人間道とは其中間に在る所謂覚醒生活であつて社会生活を完全に営むが為に歓喜勇躍して働く事」²⁴と説くのである。

1928年4月の「五年生の覚悟」という講演では、肉体の完成期に近づきつつある中学五年生に語りかける。「人生の肉体としての尊い点は、運動力では無い。(中略)我々は完全な肉体を持つた動物では満足が出来ぬ」と論じ、「作業する事が自己の本分と悟つて歓喜躍進して努力すること」こそが、他の動物には見られない人間の特色だとする。その上で、「教育の完成、第五学年生の覚悟は、生きた人間の肉と成ること、目覚めた、喜んだ肉となることで無ければならぬ」と述べている。また、「人生十七八歳から二十一二歳頃までが、最も信仰の敬虔の念の起る時」²⁵であると論じ、宗教的涵養を深めるに最も適した時期を迎えたことも伝えている。涅槃会の講演では、「人生の目的は物知りになる為でない。金持になる為でも高位高官になるためでも無い。研究的生活、向上的生活に全力を叩き込んで行く時、人生の真生活が有る」と結論づけている。

1929年11月の「研究精神」という講演では、仏教の優位性を示しつつ、人生の目的を次のように語っている。

仏教が他宗に勝れて居る点は主として菩提心を提唱する所に存する。菩提心とは一言以て之を^{おほ}掩へば研究心で有る。目覚めて研究し、絶えず研究し、研究は人生なりと言ふのが仏教で有る。更らに一面より言はゞ人生は研究な

り。稼ぐだけでは人生は詰らぬものである。研究努力が人生の尊き所以である。(中略) 諸君、研究の精神ある時、其処に輝きの生命あり、研究の精神ある処、其処に無限の楽土が在るではないか²⁶。

仏教の根本原理「縁起」を理解し(「目覚め」、肉体と精神の調和をはかり(「喜んだ肉」となり)、学業や仕事(「研究」)に打ち込むことこそが人生であると力説する。また、別の講演では法然上人に対して、「我東海中学校は法然上人の流れを受けて結ばれた学校で有る。人の為我が為に明るい道を開いた上人の精神を継承すべき運命を荷つて生まれた学校である。諸子の行くべき道は真剣味溢れる人格と成る事だ。困難を忍んで邁進せよ。九歳から八十歳まで真剣に研究した親の心を承けて」²⁷と、釈尊同様に研究に専心した人物として深く敬意を表している。釈尊や法然上人のように研究精神を持って、人生を歩んでほしい。椎尾博士は、それら先人の道をあがめ、自ら歩んできた道を重ねつつ中学生に対して「人生は研究なり」と説いたように思える。

死についてはどう捉えていたのか。在校生の一人が自殺した。その直後、1931年2月に椎尾博士は当該学年の四年生に向け、「死を破つて進め」という講演をしている。

死は易く生は難い。人生を悲観して死する人は弱い人で有る、易い道を選んだ人で有る。我々は此社会を何処までも良くする事に努めねばならぬ。従つて浄むれば従つて濁る。一人の力は誠に弱いものである。併しながら百難を排して其濁りを浄める所に人生の意義が有る。神の御力は働く人の手に現はれ、仏の御慈悲は人生を全うせんが為めに奮闘する人の胸に宿るのである²⁸。

人生は苦難の道である。一人の力は脆弱ではあるが、死を選ぶことなくこの社会の浄化のために力強く生きて行く、それこそが人生の意義だと強調する。「人生は研究なり」とし、「一日一刻も酔生夢死に陥らぬ様に」と説いた椎尾博士にすれば、自ら死を選ぶことは覚りへの道を放擲する行為と映ったのだろう。

一方で、椎尾博士はキリスト教をどう見ていたのだろうか。当時、西欧文明とともに流入し社会的な影響力が大きかったキリスト教に対する評価はとても厳しい。

西洋では耶蘇教を奉じて居るが、彼等は奇蹟を有難がる。又狂熱状態を有難

がる。神秘、狂熱之が耶蘇教の最も尊ぶ処で、十字軍がその所産である。近年段々熱が冷めては来たが、まだ相当に強い処が有る。(中略)之に反して冷静沈着に真実を窮め、大磐石の如くに安定するを尊ぶのが東洋の思想の根柢で有る。西洋文明は個人主義で有つて、競争を人生と考へ、其力を養ふが教育で有り、それを行ふが道德で有ると考へて来た。之に反して我国では人類は悉く同胞で有る、其人類の福祉の為には財を棄て、生命を抛^{なげう}つて満足する、之が日本精神で有る²⁹。

西洋文明の精神的支柱たるキリスト教を「奇蹟」や「狂熱」を有難がると断じ、東洋の思想を「冷静沈着に真実を窮め」、「安定」したものと評価する。椎尾博士は、キリスト教の対抗軸として仏教を考えていたように思える。

(3) 椎尾博士の教育観

① 学習習慣の育成

椎尾博士は学習の第一歩は真似から始まると提言する。

本当に生きて行くには、「模倣を戒め創造を励め」で無くては駄目だ。とは言へ、誤解してはならない。其は学習の第一歩は、先生を真似る事より始まる。即ち能く先生の教を受入れ、之を能く了解して、さてそれからが自己の自由発展でなくてはならぬ。小学五年生まで位は真似が多い時である。それから注意力、考察力の発達につれて、自己独特の新工夫、新発表に努めねばならないのである³⁰。

小学校と中学校との教育目的の違いを、「小学校では国民の現状を維持するやうに注入主義で詰め込みましたのが、中学では国家を進歩改良する民力を養成してゆく」と表現している。そして、「記憶力も大切であります、記憶力だけでは進歩することが出来ませんから大いに注意し、研究して記憶を基礎として学課を自由に取扱つて、人より進んでください³¹」と、予習の必要性を説く。

「深く耕せ」という一年生向けの講演では、米の収量成績のよい深耕栽培を引き合いに学習方法を紹介する。高等小学校2か年の学習では深耕主義の学習をする余裕はないかも知れないが、5か年の中学ならばできるはず。「然らば何時それを行ふべきか。苗が伸びてから田を深く掘り、穂が出てから掘り返しては稲は枯死してしまふ」、それと同様に一、二年のうちは浅耕で上級になって深掘りをは

じめてもだめだと語る。そして、「一年の初から深く深く掘り起して根が充分に張る様にせねばなりません。語学でも数学でも、其他有らゆる仕事に全力を注いで深く深くやらなければならない」³²と、初学年からしっかりと学習することを勧める。

中学時代は、「注意力、推理力の時代であつて積木の時代で無い」とし、単語の暗記カードを使用するのは、「思はざるの甚だしきもの」³³と一蹴する。「中等学校には特別の注文が有る。それは或るべく物を覚え^{ママ}ない様にして貰ひたい」³⁴とも発言している。自身の講演内容がよかったので再演をという声があったとのエピソードを紹介し、「私は一度話した事を記憶しては居らぬ。記憶を奨励せぬのは私の持論である」³⁵と反論している。

そして、「中学教育の主要なる任務は覚えさせる所に在るのでは無い。模擬的の学習態度にこびり付いて居てはいけない。中学教育の要点は当さに創造的でなくてはならない」と述べ、「諸君、日々の学ぶ事に付、何故か、どうなるかを考えよ。其時諸君の勉強は、悉く諸君の肉となり、力となり、仕事となるで有らう。之が真に生きる道で有り、諸君が生きれば、周囲が生きるで有らう」³⁶と、記憶よりも因果関係に重きを置いて学習すべしとし、それが我が身ばかりか社会にも還元されると説くのである。

また、「中学校で学ぶ事は一面の真理の羅列に過ぎぬ。然るに同一物でも無数の場面が有り、且つ絶えず動いて居り、断えず変化して居る」とし、「されば我々は既成の學術智識に満足する事なく、将来何処までも研究して自らも明るく進み、他人をも明るく進ませねばならない」³⁷とも説いている。知識も諸行無常の如く、絶えず変化している。記憶だけに依拠した固定的な知識は変化には対応できない。それゆえ、全生涯にわたって学び続けるべきだと言うのである。

学習態度についても言及する。

我々が学問をする時には、真剣になつて、我が身と其学科が一体となつてしまはねば駄目である。馬術の稽古をする人は、我が身が馬か、馬が我が身かと言ふ域に進むを見る。剣道を学ぶ人は矢張り我が身が剣か剣が我が身かといふ域に達するもので有る。(中略)

頭の中に色々の学科が千切レ千切レに覚え込まれた丈けでは、決して我が物

で無い。学科と我が身が合体して居ないのだ。嫌な学科が出来ては、いけない。嫌な学科ほど一生懸命になつてやりなさい。すると何の学科も皆好きになるもので有る。さうして総ての学科が皆自分の手足の様に自由に動く様になる時、諸君の目的が達成せらるゝのである³⁸。

個々の教科については、数学嫌いの学生が多いことを嘆きつつ、「天地間一切の物を計算し、それによりて社会生活をを進めるならば、即ち本当の数学が計画に用ひらるれば日本はモットモット進歩する。国家は限りなく発達する。夫故に諸君は十分に数学を研究せねばならぬ」と数学の有用性を強調する。語学については、「中学に於ては数学と並んで語学に力を入れる。それが骨折る割に成績が上らぬ。それは学んだことで総てを言表はす努力が足りないからである。英語で聞き英語で表はさんとする努力が足りない。赤子が少しの言葉しか持たぬながらも、其で何も彼も用を足さうと全身の力を集めて呼びかける態度を学ぶべきで有る」と助言し、日本語の使用範囲は今後増加はするものの、英語、ドイツ語、中国語には到底かなわないとする³⁹。

中学卒業後の進路については、「我々の進路は利益に由つて打算して出て来るものではない。儲かる故に医師に成らう。高き位置を得易いから大学へ進まうなどと考へると、やがて就職難といふ恐ろしい難関へぶつかる」と警告し、「諸君が前途の方針を立てる唯一の方法は、自己の能力より打算する事である。適材を適所に向けるが第一である。(中略)先以て個人としては、自己の長所に進め、仮令経済的に不利としても、自己の才力發揮に邁進せねばならない」と提言している。そして、「大学教育は学問の蘊奥を窮めしむるを目的とする」もので、語学力、理論的知識(なかでも数学)、自然科学の知識が不可欠であるとし、次のようにまとめている。

茲に私は繰返して言ふ。諸君は生活の資料を得んためならば又以上説述した大学素地の三大部分の智識に付て豊富を欠くならば、専門の職業教育に向つて進みなさい。又学問の蘊奥を極め、其道を以て国家社会に貢献せんと思ふならば、大学に入つて、専心斯道の為めに尽し地位、財産を眼中に置かない事が最も大切で有る⁴⁰。

大学教育で必要とされる三つの素養のうち語学と数学については、中学教育に

においてもその重要性を強調しており、大学への学びに繋がる重要な教科という認識があったようだ。

「大国民となる道」という講演では全人的教育の視点から論じている。中学時代は「注意力発達の時期で有つて、記憶力教育の時代で無い。覚える事に没頭する時期で無くして、本当の大国民教育完成の時で有る」と断ずる。そして、中学教育には二大欠陥があるとする。

即ち其一は学科に統一の無い事である。各科先生が各科を中心として揉んで居る。之では纏つた人間には成りにくい。今一は大国民教育が出来て居ない。日本国民としての道念、人生としての信念が欠けて居る。燃え立つた透徹様な信念が無い。大国民の道念を明るくするやり方になつて居ない。

(中略)

諸君は本当の国民となる為め先づ第一に有らゆる学科を通じて偏頗な人間にならぬ様に努力することだ。(中略) 身体各部が統一し均整調和を保つて伸びる様に、円満な人格になる事を心掛けるが宜しい。従つて不得手な事には、特に努力して其発達を期すべく総ての方面の伸びた多面的な人になることを努めなさい。自己の欠点短所を矯めることに全力を尽しなさい。(中略)

総ての教を受けるに、唯円呑みにせず、充分に分析し、実験し参考資料を集めて徹底的に研究しなさい。総ての事柄は表面は千差万別になつて居るが、深く根本に入ると皆同一に帰して居る。(中略)

第二に大切な事は、本当の国民になるために、日本国民としての信念、道念を養成する事である。如何なる国難に会つても潰れぬぞといふ信念を持つことである。如何に困難な戦争が起きても、如何なる天災地震が有つても天壤無窮の国運を支持するといふ熱烈にして且つ不撓不屈の精神を湧き立たす所の信念を有することである。此信念こそ国を守り国を生かす力の根源である⁴¹。

学習においては、不得手な教科をなくし、「有らゆる学科を通じて偏頗な人間にならぬ様」に注意喚起しつつ、「徹底的に研究」することを勧める。その上で、信念ある国民になるように求めている。

② 生活習慣の確立

椎尾博士は、人生とは仏教の根本原理「縁起」を理解し（「目覚め」）、肉体と精神の調和をはかり（「喜んだ肉」となり）、学業や仕事（「研究」）に打ち込むことであると説いた。そうした人生を歩むため、日々の過ごし方について言及している。

第一今日の充実に努力せねばならぬ。諸子が将来、高等の学校に入り、社会に立ち各々の任務を完うする道は今日の本分を完うする処より基礎づけられる。今日、最も規律正しく、今日、最も熱心に、今日、最も元気に生活せなければならぬ。諸君の内には明日から勉強せう。来月から心を改めやう。来年から真面目にやらうと考へて居る人が有る様に思ふ斯様な人は、明日になれば、復明日から、月が變つたら、年が變つたらと相變らずブラブラで酔生夢死して行くもので有る⁴²。

今日という日を大切に、学業に励み、やるべきことを「明日から、来月から、来年から」と先延ばしにしてはならないと言う。

「行る可き時は今」という講演では、時間に関する話題を取り上げている。吉田松陰が刑に処せられる直前まで読書していた故事を引用しつつ、「先生は勉強研究が人間生活の第一義で有ると考へられた様に見えるでは無いか。我々は何時死ぬか判らぬから、生命の在る間に一生懸命になつて勉強したり仕事をして遺憾無く死ぬる様にして置かねばならぬ⁴³」と述べている。

「三つの浪費」という講演では、避けるべき浪費として「時間の浪費」、「金銭の浪費」、「自己の能力、体力の浪費」の三つを取り上げている。その第一に「時間の浪費」を取り上げ、各地で講演活動を行った経験から、時間の観念に対する認識の甘さを批判する。

何処へ行つても予定の時刻に開会する事が出来ない。其処で私は三十分以上遅れる地を下等地と名付け、三十分乃至十五分遅れる地を中等地、十五分以内の所を上等地として、之を以て其地常識發達の尺度として話をした事の有つた。私は先以て時間の観念の不正確を攻撃した。私は到る処で叫んだ。智識学問も必要で有らうが、実生活は更に大切で有る。

実生活を充実するのが学問の目的ではないか。其実生活は時間の連鎖では無いか。さすれば時程大切な物は無い。其時を尊ばない学問ならば、其は空虚

なもので有ると⁴⁴。

椎尾博士にとって、「人生は研究」であり、涅槃への道を目指すべきものであった。学問研究の目的は実生活の充実であり、実生活は時間の連鎖であった。一日一刻を懸命に生きるために時間ほど大切なものはないと考えた。椎尾博士の和歌「時はいま ところあしもと そのことに うちこむいのち とわの御命」は、このような時間に関する深い洞察が落とし込まれたものに思える。

生活習慣の確立のためには意志を養うことが大切であるが、はじめから過大な目標を立ててはならないと論ず。「三度三度の食事の前に『頂きます』、食事終つて『御馳走様』といふ事を継続してやろうと決心して御覧なさい。之は必ず実行が出来ませう。そうして次第に立派な人格が養はれる」⁴⁵と、意志を養う第一歩として食作法を奨励している。まさに現在、東海中学・高等学校で実践されている食作法⁴⁶の源流であろう。

③ 農事教育の重視

「作業教育に就いて」という講演は、1931年の中学校令施行規則の改正⁴⁷を受け、同年6月から東海中学校で作業科⁴⁸の学習が始まることを受けたものだった。まず椎尾博士は、「^{そもそも}今回の改正の要旨は一昨年六月東久邇宮殿下御下問に対し浦和中学校長の御答へ申上げた現在の中学校の欠点たる『勤勞を厭ひ至誠事に当るの意気を欠く』といふ此中学校教育の欠陥を充実せんが為め」であるとするが、「自分は大正二年本校改造の際、山下管長猥下に勤儉誠実の四字の揮毫を乞ひ、之を目標として進み、其後の校長職員皆此精神で本校の教育に当つて居られる事は諸君周知の事実で有ります。即ち二十年前の本校改造の際の大精神が今日全国教育の方針となつたに過ぎない」とし、すでに改正の趣旨に沿った教育を本校では実施済みであると述べている。

また、「改正の要旨は単なる労働では有りませぬ。若し無理強ひに労働させてそれで教育の効果を挙げたと思はばそれは大なる過誤で有ります。然らば勤勞教育の目的如何。青年期の肉体を業務的に発達せしめんとする処に在ります。詳言すれば、人生の目的は社会の完成に在り。社会の完成は各自が社会構成の一要員となつて、何等かの業務に就き、其業務の尊厳を感知し、喜び勇んで其業務にいそしむ所より来るので有ります」⁴⁹とする。これは、椎尾博士が繰り返し述べて

いる「仏教の根本原理「縁起」を理解し（「目覚め」、肉体と精神の調和をはかり（「喜んだ肉」となり）、学業や仕事（「研究」）に打ち込むことこそが人生」という論理である。

さらに、「要するに単なる実業の知能養成は我々の謂ふ所の業務教育ではありませぬ。その上商業や工業の教育は我々の目的達成には不適當で有る。社会教育的の農事教育こそ此目的に最も適合して居るのであります。私は有らゆる教育の根本として農事教育を奨める者である。人を作るには之が最も宜しい。（中略）何故に農事教育が宜しいか。生成発展する大自然の上に立つからである。（中略）農事教育に於ては因果の関係がある。自然性を発展せしめる事に目覚める。少青年をして、自らを教育者たらしめる。之は商工業では望む事が出来ない」⁵⁰と、農事教育の重要性を強調している。

別の講演でも、「抑々農業は永遠の国のイノチである。我々が一坪の庭にでも草花なり野菜なりを育て上げて見ると、天地生成の神仏の聖業に参与する気持を味はうことが出来る。（中略）今日の思想悪化は愛農精神、尊農精神の欠乏から来て居る」⁵¹と述べている。椎尾博士の農事教育重視の立場は、仏教の「縁起」の世界観から来ているものと考えてよいだろう。

④ 家庭教育の重視

「母の責任」という講演は、1932年10月に設立された母の会の総会でなされたものである。明治以来の規則詰めの教育の欠陥に言及し、「此様な官僚式では本物の物は出来ない。それを打破り、家庭の親子兄弟の集団の様に此学校を改造し、潤ひの有る、円味暖味の有る物にしなければなりません。此学校が出来たのはかうした理想が出発点でありまして、此学校精神は教へる人、教へられる人が變つても終始一貫して居ます。之が私立学校の長所であり、本校の特色である筈であります。母の会が開かれたのは、此学校精神を徹底させる為である」と、設立の意義を強調する。

中学卒だけで歓迎された時代は終わったとする一方、「唯本当の人間、役に立つ人間ならば幾らでも歓迎するので有ります。其処で学校も家庭も其気になつて本当の人間にせねばなりません。夫故に皆様の御子さんを預かり教室で教へた丈で役目が済むものではない。露骨に言へば学校は家庭を御指導せねばならない」と、

家庭の役割の重要性を語る。そして、「家庭や環境を直さぬと生徒の悪癖は直りませぬ。口で言つて聞かせた丈では直るものでは有りませぬ。又個人の癖は学校では直りませぬ。どうしてもそれは家庭で直さなければなりません」と、学校の指導に限界があることも吐露している。

主婦が時計のねじを巻き始めてどの家の時間認識も改まったという新潟県柏崎の話を引き、「かような御話は父兄会では徹底しませぬ。何故かならば父兄は十の話聞いて一を伝える。自分だけ呑み込んで家族に伝へない。家庭の外に多く暮す父兄がそれでは、学校と家庭の連絡は付きませぬ。それ故に父兄会は実はどうでも善いが、母姉会は必要であります。教養の力は父兄より母姉の方に在るのであります」と、家庭において母親が要であることを強調し、釈尊の説話を引く。

釈尊も女の尊さを色々説かれました。五障三従は説かれたが、あれは寧ろ小事で、女を引立てる様にやられたのであります。そして女の尊さは育てる事であると強調せられました。

母（摩耶夫人）と七夜に別かれ、叔母さんに育てられた釈尊は婦人の養育の尊さを懇切に説かれました。

そして、「要するに子供を育てる責任の最大部分を負担するのは母親でありますから、学校とよく打合せて時代に適する教養をなさる様に御願ひします」⁵² と、講演をまとめている。

1932年11月の「四、五年生のお母様方へ」という母の会の講演では、「殊に中学の三年から五年生まで位の者は、思想の最も動揺する時代で、感情の動きが強い時期であるので、逆つていかず棄て、置いていかず。斯様に世の中が不安で有る上に、子供が向ふ見ずに動く年頃で有るので、今日の皆様程母として子供を教養するに六つかしい時代は無いので有ります」と、同情の念を示しつつ、かつては大学を卒業していれば身の治まりはついたが、「今日は高等教育を受けたとて高い地位が得られるでも無く、特権が附く訳でも有りませぬ。寧ろ実業界で高等学校を受けた者を嫌ふ」とする。愛知県では工場での独自の教育システムが機能して成果を上げており、専門学校や大学の卒業生を歓迎しないとの見解を示している。

そして、「今日の日本は上級学校が多過ぎます。而も入学志願者が多過ぎる。

そこで頭の優秀な者のみが入り得る。併し頭の優秀と言つても記憶力が主となつて居るので、真に優秀であるは疑問」との認識を示し、「若し上級学校へ行くなら、研究力の有る者で無ければ駄目です。研究力の有る者は何処へ行つても宜しい。又現在に於ては学校の成績が悪くても、先で伸びる見込の有る者は上級学校へ行つて良いと思ひます」⁵³と、母親に対して進路選択の判断材料として「研究力」の有無に着目してアドヴァイスしている。また、思想問題、ことに社会主義に対して警戒すべきと母親に対しても喚起しているのである。

(4) 建学の精神

①校訓「勤儉誠実」

椎尾博士は講演の中で建学の精神にかかわる話に触れることが多い。なかでも校長就任時のエピソードはしばしば語られる内容である。

大正の初に此学校の存廃問題が起きたのです。廃校説も大分強くは有つたが、結局存置する事になり、私は東京から通ひつゝ、一校を背負つて立つ事になつた。当時一中の日比野先生は盛んに運動を奨励せられ、明倫では知能第一主義で之に対抗せられた。其時私は思つた、一中の方針も悪くは無い。明倫の主義亦宜しい。(中略)併し社会の中堅^{しか}を作る事が更に必要である、信念の有る確實堅固な人間(足だけで無い、頭だけで無い)を作る事が更に必要な筈だと。其処で定めたのが仏教の大精神の一面で有る勤儉誠実の二大徳目をモットーとして進まうと言ふ事で有つた。言ひ換へるとマジメでハタラク事で有る。此事さへ出来れば世間に信頼される人間と成り得るので有る⁵⁴。

時世を表層的な浮足立ったものと認識していた椎尾博士は、生徒に対してそうした気風に抗い、堅実な人間になるよう説いている。「私は諸君に対し、此(筆者注：信仰的)敬虔なる態度を以て、国家の中堅人物たるの修養を積まれんことを冀望する」⁵⁵、「諸君智識偏重を戒め、動物性を駆逐して堅実なる精神を養ひ仕事に喜び進まん事を切望する」⁵⁶というように、「中堅」や「堅実」などの表現を用いて理想像を掲げている。

「勤儉誠実」の校訓は、一義的には覺りに至る道をまじめに希求するという仏教的なものであろうが、浮華な世を憂いこれを何とかしたいという椎尾博士の強い思いの表れであるようにも思える。社会主義運動を警戒する件では、「東海中

学の校風は勤儉誠実で有るといふ事を実現させたい。諸君には立派な学校のモットーが有る。願くは世の風潮より超越して、其荒波を押切り其悪風を叩き破ぶる人が出てほしい」⁵⁷と説いている。その一方で、国家社会を毀損するような動きには懐疑的で、「今一つ大切な事は如来心と云ふ事である。之は自然の法則を尊重して無理をしない事である。世間には晴れやかな手取早を望み、無理をし、過激な事をする者が有るが、之は身を亡ぼし、社会を破る事になる。悠久の精神、無理の無い行動が大切である」⁵⁸と説くのである。こうした思いは、校歌2番の「誠実我を欺かず 勤儉永久にいそしみて 天をおそれて矩躰えぬ至純の心ねがわくは この靈光に照らされて確信の歩をかためつつ み国の民の道往かん 高き理想の道往かん」に如実に反映されている。

一年生に向けた「東中精神」という講演では、「東中の特色は人間の中学校にしたいと云ふ事で、換言すれば本校の卒業生は上級学校に進む頭の人となる計りが能では無い。活動の出来る足の人となる計りが芸でも無い。頭も有り、腹も有り、足もある人間らしい人間となり、端的に言へば、頭や足は仮令弱くとも信頼の出来る人らしき人になる事で有る」と述べ、「信頼される人となる目標は何か。控室に掲げられて諸君が毎時間親しんで居る勤儉誠実の四字が其れである」と校訓につなげて次のようにしめくくっている。

我々は健康力、忍耐力を養ひて勤儉誠実を体験し信頼の出来る人間となりたいもので有る。如何なる場所でも、如何なる人でも「東中か！ それなら信頼が出来る」と言うて呉れる様になりたいもので有る。

諸君重ねて言ふ。上級進入率が東中の特色では無い。優秀者の集りが東中の誇では無い。国の為めにも社会の為めにも信頼し得る真人間となれ⁵⁹。

②三綱領⁶⁰「～信念ある人～」

椎尾博士は「本校の特色」という講演で、「本校が明治の末に中学となつてから今日に至る二十余年に間に、表面に立つ校長は数回代つたが、其間を通して鈴木君がやつて来た御話になる通り、他の官公立学校に見る事の出来ぬ一貫性を持つて居るのが本校の特色で有る。自分も名を出すと出さぬとの区別はあるが、断えず多少の關係を持つて居る」とし、自らの立ち位置も含めて一貫した方針で教育が展開されてきたことを強調する。「幸に本校には其一貫性が有るので、設立

方面にも先生の方面にも其が有る如く、生徒卒業生の間にも一貫せる力が顕はれ、年を逐つて強くなるで有らう。二十年三十年五十年と年代を経るに従つて他の学校に見る事の出来ぬ強い力の現れを見る事が出来る様になる有らう。其はやがて在学する総ての人に著しい影響がある事と信ずる」と未来に希望を寄せる。そうした一貫性のある好例として慶応義塾をあげ、これに早稲田が次ぐとする。

教育をめぐる状況の変化を踏まえつつ、東海中学の特色を次のようにまとめている。

本校は全く教育目的を以て生まれ官公立で出来ない特色ある教育をするのが根本で有る。

それが従来は政府の方針の為に、本校の特色を発揮する事が出来なかつたが、昭和時代になつて教育の画一打破の要求が各方面に起り、文部省に於ても方針を変へて来て、段々本校の主張が通る様になつた。然らば本校の主張は何で有るか。第一信念の教育で有る。上級学校合格を唯一の目的とする誤つた方法を打破し、伸び盛りの者に信念を持たせるのが根本で有る。信念を単なる宗派の仕事で有る様に誤解してはならない。今日国家最大の憂は国民の無信念といふ事で有る。教育の程度高き程非国民の多いと云ふ事である。其処きゆうぜんで翕然として信念教育の必要が叫ばるゝに至つたのである⁶¹。

現在東海中学・高等学校で実践されている宗教情操教育の大枠を指摘するかのような発言であり、三綱領の「明照殿を敬い信念ある人となりましょう」に通じる理念である。

③三綱領「～善良の個性を啓発～」

椎尾博士は「勤儉誠実」という講演で、官公立学校に対する私立学校の優位性を二点あげている。

さて 儲私立学校を経営するといふことは難儀なもので有る。教育事業には相当の金が要るので、官公立の学校は国費や県費から支弁を受けて居るので有るが、私立学校には有力なる支持者が無い。其処で自然設備の方面が豊富に行かないのが私立学校の短所で有る。併しながら唯一官公立の出来ぬ長所を持つて居る。それは官公立に於ては総ての人が一枚の辞令で移動するので、校長職員の永住性が乏しい。従つて校長も主義主張が出来ぬ。自然、学校の主義主

張が出来ぬ。自然、学校の主義方針といふものが時々変動する計りで無く、一人の校長の方針にも徹底性を欠くのであつて、之が官公立学校の短所である。つまり、私立学校は精神的主張を永く継続して行く事が出来るが、官公立では之が出来ないのである。

続けて、「教育の最も大切な事は設備では無い。先生方の精神主張がピッタリ這入る事で有る」とし、松下村塾の吉田松陰の事例をあげて教育にとって重要なものは設備よりその精神であるとする。「大正の初に私は此学校に関係した。今表面に於て関係は無いが、私共の主義方針が今も残つて居るのである。此主義主張を永遠に貫き得る処が私立学校の喜びで有り、私立学校の尊い処で有る」と、私立学校の優位性の一点目をあげる。

そして、「第二に、教育は個性を尊重せねばならない。皆の顔が違ふ様に皆の個性が違ふ。それで教育は生徒や先生の自由を認めるが宜しいのである。教育の画一は避けねばならぬが、規則だけで管理する学校は先生の扱方も生徒の扱方も自然に画一になる。之が官公立校の第二の短所である」⁶² と、私立学校の優位性の二点目をあげている。生徒や教師に自由を与え、画一的な教育を避け独自の教育を追求していく。三綱領の「勤儉誠実の校風を尊重してよい個性を養いましょう」に通じる理念である。

④三綱領「～国家有要の徳器～」

椎尾博士は卒業を控えた五年生に対し、将来の選択肢の一つである大学について次のように問う。「世間には盲目的に大学に向つて突進せんとする者が多い。(中略) 大学は学業研究の場所であつて職業を授くる所では無い」と苦言を呈しつつ、「諸君は将来如何なる業務に就く積で有るか。学界に身を立てるも宜しい。併しそれは研究的でなければ駄目だ。生活の為めなら駄目です。如何なる業務に就くも其れに依り国家を負つて起つといふ考が大切である。堅実な実力を養ひ、努力と考察によつて進まなければならない」⁶³ と、これまで東海での生活で培った気風の確立を促している。

卒業生に向けた「時代を解せよ」という講演では、「中学卒業といふ事は、学成りたりと思ふべきもので無く、勿論自負すべき状態で無い」と苦言を呈した上で、「職業選択に付ては軽浮なる従来の態度着目を改めねばならぬ。従来は政治家に

なれば権勢が得らんとか楽をして金儲が出来るといふ様な意味で政治家たるを望んだ者が多かつた。今後は左様な浮いた考へ方では駄目である。堅実なる社会生活の支持者たらんとして進んで行くべきである。社会の綱紀を維持し社会を堅実にするために全力を捧げたいといふ志で進むべきである。其他如何なる職業にても人生をして意義あらしむるために、最も適當なる役割を引受くる目的を以て選ぶべきである。即ち各自の理想実現を目標として職業の選択をなすべきである」⁶⁴ と、餞の言葉を送っている。

三年生に向けた「志気を確立せよ」という講演では、具体的な職業選択について「日本人は尚武の精神が強く、其為めに軍人志望者が多い様であるが、武は退いて守るの道に過ぎぬ。国民全部に其精神有るは可いが、職業としての軍人を志望するのは一部適當の性格者は宜しいが、大多数は積極的使命即ち産業への努力、文芸への精進、平和への進歩を担当すべきで有る」と、軍人志望を退けて、「明治維新に於て日本の覇権を握つた薩長土肥の軍人と政治家の時代は既に過去つた。今や産業実力の上に立つ者が将来の日本の覇者で有り、太平洋のリーダーで有る。諸君は進路を此処に発見し、其準備に努力せられん事を冀望する」⁶⁵ とし、産業を牽引するような立場に立つべきであるとの見解を示している。

別の講演では、仕事に必要な研究心について「自己の全生命を研究努力に投げ込み、一生を貫いて向上して行く時、其処に光明世界が展開するで有らう」⁶⁶、「日本の進む可き道は研究力を以て世界を引摺る事ではなければならぬ」⁶⁷ というように、仕事をする際には研究心が必要であると強調している。三綱領の「平和日本の有要な社会人となりましょう」に通じる理念である。

3 まとめ

現在使用されている生徒手帳には、三綱領、校歌、食作法、「とはのみいのち」の歌など、椎尾博士に由来するものが多く収録されている。これらが、校風の基となったことは言うまでもない。講演の題目は違っても、椎尾博士は同じような趣旨の発言を繰り返している。名誉校長として直接語りかけた言葉は、多くの卒業生の心に銘記されただろう。講演内容を検討して、「東海学園中興の祖」と称される所以がよく分かった。「椎尾先生が名誉校長として、直接に教育面、経済面、

校長人事面すべてに大きな陰の力となって、活躍しているわけであります」⁶⁸と表現された通り、学園の牽引役として八面六臂の活動をしていたことが史料から垣間見える。椎尾博士の活動を校長在任期間という時間枠でとらえがちだが、名誉校長となった後の講演活動が校風の確立に大きな影響を与えたことは間違いないだろう。

椎尾博士は天皇を中心とする国家に信頼をおき、それを毀損しようとする社会主義を敵視する立場をとった。表層的な大衆文化に異を唱え、まじめに仕事をすることを説いた。その根源には仏教の根本原理「縁起」があった。縁起を理解し、肉体と精神の調和をはかり、学業や仕事に打ち込むことこそが人生であると考えたのである。浸潤しつつあったキリスト教には批判的で、その対抗軸として仏教を位置づけていたようだ。

こうした人生哲学にとどまらず、日常の学習活動についても事細かなアドバイスをする。予習が必要であることや初学年から深耕主義で学習することを推奨した。記憶だけに依拠した固定的な知識の習得には批判的で、社会の変化に対応するために全生涯にわたって学び続けるべきであると力説した。個々の教科を万遍なく学習することを勧めつつ、大学での研究を見据え、特に数学や語学に力を注ぐように述べている。儲かるから、高い地位を得やすいという理由から大学に進もうといった自己の利益のための打算的な進路選択を戒め、自己の能力により選択すべきであると説いている。

縁起を理解し、肉体と精神の調和をはかり、学業や仕事に打ち込むことこそが人生であると考えた椎尾博士にとって、日々の過ごし方は重要事項であった。生活習慣の確立、なかでも時間の管理について厳しい。そこには、「人生は研究」であり、涅槃への道を目指すべきものであるとの仏教理念があった。学問研究の目的は実生活の充実であり、実生活は時間の連鎖であった。その思いは「時はいまところあしもと そのことに うちこむいのち とわの御命」に収斂されている。その他、食作法につながる食前食後の合掌の勧め、農事教育や家庭教育の重視など、いずれも仏教的世界観から導き出されたものであった。

校訓「勤儉誠実」は、一義的には覚りに至る道をまじめに希求するという仏教的なものであった。加えて、椎尾博士は、生徒に対して表層的な浮足立った気風

に抗い、堅実な人間になってほしいとの思いを持っていた。

私立学校は財政面では官公立学校には劣るが、校長の永続性があり、主義主張が一貫しやすい点で優っているとす。画一的な教育をする官公立学校では「個性」を重視することはできない。教育には個性が必要であり、そのため、生徒だけでなく教員も自由に取り組みのできることが肝要だとす。現在のリベラルな校風の基も、椎尾博士のこの方針にあるように思える。

戦前、宗教教育は、教育と宗教の分離という文部省の方針からできなかった。それゆえに、椎尾博士は「忠魂祠堂」⁶⁹の再建にあたり、「文部省の指示に抵触しないかたちでの本学園の宗教教育について熟慮されて、阿彌陀様を拜むことでは許されないから、明治天皇と昭憲皇太后のご尊牌をお祀りして、これに日々お詣りするというかたちを考えられ、その頭文字を並べた「明昭殿」ということに改称」⁷⁰するという策で対峙した。講演では仏教的な内容もしばしば語られたが、表立った宗教教育はできなかった。国家に対する信頼を醸し出しつつ、「信念」という言葉を全面に打ち出して宗教的情操の涵養を目指したのではなからうか。そして、卒業後も研究心を持ち続けることを期待し、「国家有要の徳器」たる人物の養成を目指したのである。

こうした椎尾博士の精神は校歌や戦後改訂された三綱領（「勤儉誠実の校風を尊重してよい個性を養いましょう」、「明照殿を敬い信念ある人となりましょう」、「平和日本の有要な社会人になりましょう」）に確実に流し込まれている。

最後に、1930年、卒業を間近に控えた5年生への講演の一部を引用しておきたい。

さりながら堅実なる国民としての過程の第一階段を踏み占めたので有るから、将来国民の中堅として堂々と歩武を進める様にありたい。殊に東中の主義は完全なる人間とならんとするに有るのだから、小にしては自己の本務を尽して一身を完うし、大にしては国民として社会人として其義務を竭し、有らゆる人により信頼される人となつて欲しい。

（中略）

東海同窓の特色如何と人間はゞ、言下に一個の国民として信頼し得る実行家で有ると答へ得なければならぬ。過去の唯物的教育はかゝる重大なる祖国の

使命を果すといふ精神を十分に養ふ事が出来なんだ。(中略)

五ヶ年間、本校に於て学びし智識技能は、やがて消滅し去る事も多からう。併しながら此精神は常に念頭に置いて欲しい。人生の最も重大なる目的は金銭でも無い、権力でも無い、業務の成否、毀誉褒貶より全く超越して、侵されざる此信念を持つて欲しい。本校が浄土宗信仰中心の上に建てられたもの^なに公立学校の設備不足を補充するだけの意味では無い。唯公立学校に期待する事困難なる此精神を養ひ以て社会国家の進行の第一線に立つ人格を養成したいためである。諸君が学校の希望する程の修養を積み得たとは想はないが、他の学校の生徒に比較すれば相当の特色を自覚して居られるで有らうと想ふ。願はくは其精神を益伸展せしめ、同窓互に相助け相戒しめ諸君自らの人格を偉大ならしむると共に、母校に対しても諸君の力を以て後進を指導して貰ひたい。(中略)

諸君は卒業後上級学校の人となるも、或は直ちに実社会に活動する人となるも常に此大精神を發揮して社会のため国家のために尽されん事を希望します⁷¹。

椎尾博士は、教育という営みの限界を肌で感じつつも、卒業生に東海で培った信念を持ち続け、社会や国家に貢献する人物たらんことを願っていたのである。

-
- 1 東海学園資料館には、初期の会報のうち、1911(明治43)年3月30日発行の第2号と1918(大正7)年3月11日発行の第8号の2冊が所蔵されている。それぞれ240頁、112頁と大部なもので、発行者は私立東海中学校校友会とある。
 - 2 発行人は、第10巻の1以後、鈴木真順とある。鈴木真順は、のちに校長となって在任中に死去するが、それまで発行人を続ける。第31巻の9(昭和15年10月10日付)以後、発行人は村瀬亮音となる。なお、第33巻の2、3(昭和17年4月10日付)を最後に巻の表記はなくなる。
 - 3 「発行の回数増加に際して」『東海会報』第10巻の1、1920年9月1日。
 - 4 鈴木真順第四代校長の死去に伴い、稲垣真我第五代校長就任までの間[1940(昭和15)年10月19日~1941(昭和16)年1月23日]は、校長事務取扱を兼務していた。
 - 5 衆議院議員在職期間は、1928(昭和3)年2月20日~1930(昭和5)年1月21日、1936(昭和11)年2月20日~1937(昭和12)年3月21日、1937(昭和12)年4月30日~1942(昭和17)年4月30日の3期。

- 6 椎尾弁匡「誤れる体育」『東海会報』第17巻の11、1927年11月28日。
- 7 椎尾前掲「誤れる体育」。
- 8 椎尾「難関突破の法如何」『東海会報』第17巻の6、1927年6月30日。
- 9 藤井實應『椎尾弁匡先生の片影』1990年、80頁。
- 10 『東海学園創立百年史』東海学園、1988年、178頁。
- 11 前掲『東海学園創立百年史』191頁。
- 12 『東海中学校・高等学校同窓会名簿』東海中学・高等学校同窓会、2013年、31頁。
- 13 椎尾「御大典記念」『東海会報』第18巻の11、1928年11月30日。
- 14 椎尾「新時代の学生の覚悟」『東海会報』第18巻の12、1928年12月20日。
- 15 藤井前掲『椎尾弁匡先生の片影』89頁。
- 16 椎尾「模擬と創造」『東海会報』第17巻の5、1927年5月31日。
- 17 椎尾前掲「難関突破の法如何」。
- 18 椎尾「学生への警告」『東海会報』第19巻の7、1929年7月20日。
- 19 椎尾「聯盟離退の詔書と本校精神」『東海会報』第23巻の5、1933年5月28日。
- 20 椎尾「衆庶各々其業務に淬励せよ」『東海会報』第23巻の7、1933年7月20日。
- 21 椎尾「過去十年と将来十年」『東海会報』第23巻の11、1933年11月30日。
- 22 椎尾「涅槃」『東海会報』第22巻の2,3、1932年3月6日。
- 23 椎尾「釈尊の成道」『東海会報』第23巻の12、1933年12月20日。
- 24 椎尾「覚醒生活」『東海会報』第16巻の5、1926年5月22日。
- 25 椎尾「五年生の覚悟」『東海会報』第18巻の4、1928年4月28日。
- 26 椎尾「研究精神」『東海会報』第19巻の11、1929年11月26日。
- 27 椎尾「法然上人」『東海会報』第22巻の4、1932年4月30日。
- 28 椎尾「死を破つて進め」『東海会報』第21巻の2、1931年2月28日。
- 29 椎尾「昭和十年を迎へて」『東海会報』第25巻の2,3、1935年3月7日。
- 30 椎尾前掲「模擬と創造」。
- 31 椎尾「椎尾博士講話」『東海会報』第16巻の7、1926年7月18日。
- 32 椎尾「深く耕せ」『東海会報』第20巻の9、1930年9月26日。
- 33 椎尾前掲「難関突破の法如何」。
- 34 椎尾「学習の方法」『東海会報』第18巻の9、1928年9月25日。
- 35 椎尾「時局に対する国民の覚悟」『東海会報』第22巻の1、1932年1月31日。
- 36 椎尾「創造的学習態度」『東海会報』第17巻の12、1927年12月12日。
- 37 椎尾「第一線に立つて働け—卒業式訓示にかへて—」『東海会報』第20巻の2、3、1930年3月6日。
- 38 椎尾前掲「学習の方法」。
- 39 椎尾「学年初に於て」『東海会報』第24巻の5、1934年5月31日。
- 40 椎尾「中学生の行くべき道」『東海会報』第18巻の6、1928年6月25日。
- 41 椎尾「大国民となるの道」『東海会報』第18巻の7、1928年7月20日。
- 42 椎尾「新時代の学生の覚悟」『東海会報』第18巻の12、1928年12月20日。

- 43 椎尾「行る可き時は今」『東海会報』第21巻の4、1931年4月30日。
- 44 椎尾「三つの浪費」『東海会報』第21巻の5、1931年5月28日。
- 45 椎尾前掲「新時代の学生の覚悟」。
- 46 合掌し心を落着け感謝の心をもって、食前に「本当に生きんが為に 今この食をいただきます 与えられた天地の恵を感謝します いただきます」、食後に「ご馳走さま」と唱える。椎尾博士の講演内容から、1928年当時は、まだ食作法が定着していなかったようである。『創立124周年記念図説東海学園史』（2012年）にある「東海名物水練会の今昔」（35頁）という記事中に松濤基道氏による「食作法を唱えて食事」というスケッチがある。スケッチは昭和14年代とあるので、1939年ごろには食作法が定着していたと思われる。
- 47 作業科は公民科とともにこの改正時に設置されている。作業科設置のねらいが、当時の資本主義の危機的状況をのりこえる一方策として、「思想善導」のための勤労愛好精神の涵養にあったのではないかとの見解がある。（横山悦生「戦前の中学校における作業科：その設置をめぐる経過と作業科の実践の展開に関する研究ノート」『技術教育学研究』第3号、1986年9月、102頁）
- 48 作業科の新設にともない、1931年には工作室が新築された（前掲『創立124周年記念図説東海学園史』40頁）。昭和14年度職員組織表には「図・工 2担任補 中野広」とあり、図画担当教員が作業科も兼任。また、「商・簿・珠 山田信融」とあり、商業・簿記・珠算などの実業科目も開講（前掲『東海学園創立百年史』258頁）。昭和18年度職員組織表には「農耕 1年担任補 花木政光」とある（前掲『東海学園創立百年史』286頁）。1942年には、学校農場が現在の名古屋市港区土古に設置されている（前掲『東海学園創立百年史』279頁）。この農事教育は極めて戦時色の強い性格のものと考えられる。
- 49 椎尾「作業教育に就いて」『東海会報』第21巻の6、1931年6月28日。
- 50 椎尾前掲「作業教育に就いて」。
- 51 椎尾「国体精神の発揚」『東海会報』第22巻の8、9、1932年9月28日。
- 52 椎尾「母の責任」『東海会報』第22巻の10、1932年10月30日。
- 53 椎尾「四、五年生のお母様方へ」『東海会報』第22巻の12、1932年12月20日。
- 54 椎尾前掲「聯盟離退の詔書と本校精神」。
- 55 椎尾前掲「五年生の覚悟」。
- 56 椎尾「人間性を發揮せよ」『東海会報』第19巻の9、1929年9月27日。
- 57 椎尾前掲「学生への警告」。
- 58 椎尾「新卒業生への餞」『東海会報』第24巻の3、1934年3月7日。
- 59 椎尾「東中精神」『東海会報』第20巻の1、1930年1月29日。
- 60 戦前の旧三綱領は、「本校の教養を受くるものは、常に教育勅語の趣旨を体し、国家有要の徳器を成就するに勉むべし」、「明昭殿を崇敬し、^{したが}維新開国の宏謨に違ひ、止進宜しきを期すべし」、「勤儉誠実克く校風を遵守し、善良の個性を啓発するに努むべし」（松濤基道「椎尾先生と東海学園」、『研究紀要』第6集、東海高等学校教育文化研究所、

- 1971年、9～10頁)であった。
- 61 椎尾「本校の特色」『東海会報』第24巻の4、1934年4月29日。
 - 62 椎尾「勤儉誠実」『東海会報』第21巻の7、1931年7月18日。
 - 63 椎尾「志望を確立せよ」『東海会報』第20巻の4、1930年4月29日。
 - 64 椎尾「時代を解せよ」『東海会報』第19巻の3、1929年3月6日。
 - 65 椎尾「志気を確立せよ」『東海会報』第20巻の7、8、1930年7月20日。
 - 66 椎尾「卒業後の進路」『東海会報』第21巻の3、1931年3月3日。
 - 67 椎尾「中学を卒へんとする諸君に」『東海会報』第23巻の2、3、1933年3月7日。
 - 68 松壽基『椎尾弁匡先生伝』東海学園同窓会、1961年、25頁。
 - 69 日清戦争の戦没者慰霊の為に各地に建てられた。名古屋には、1901(明治34)年東海中学校の前身となる第四教区宗学教校の校地に建立された。祠堂は講堂を兼ねていた。1912(大正元)年、忠魂祠堂は台風により校舎とともに倒壊した。校舎と忠魂祠堂の再建を託され、校長に就任したのが椎尾博士であった。なお、忠魂祠堂については、西形久司「史料紹介『仏教忠魂祠堂』と呼ばれた頃—明照殿の起源」(『研究紀要』第11集、東海高等学校・東海中学校、2016年、4～16頁)に詳しい。
 - 70 松壽基道「椎尾先生と東海学園」『研究紀要』第6集、東海高等学校教育文化研究所、1971年、9～10頁
 - 71 椎尾前掲「第一線に立つて働け—卒業式訓示にかへて—」。

追記

本稿を足掛かりに、別稿(仮)「東海中学校における椎尾辨匡の講演活動と校風の確立」(羽賀祥二編(仮)『近代日本の思想と地域社会』吉川弘文館、2018年3月刊行予定)でも解明を進める。

昨年より東海学園資料館担当を委嘱され、史資料の整理を始めた。本稿で用いた戦前の「東海会報」については、文書の電子化が完了した。2023年は椎尾校長就任110年、2028年は学園創立140年の節目となる。『東海学園百年史』に続く『東海学園百五十年史』編纂を考えた場合、着手する好機でもある。学園史編纂は膨大な時間と労力が要される。理事会で議論を進めて頂くことを是非ともお願いします。

キーワード：椎尾辨匡 東海中学校 講演

(たかぎ しげき 東海高等学校 教諭 共生文化研究所 研究員)